

## 第19回全国大会

2019年11月23日(土)、於 近畿大学 東大阪キャンパス

### 要 旨

#### Ⅰ 研究発表

##### 第一室

1. 家庭主義とサッカーの風刺的視線——『英国のスノップたち』を中心に  
岡本 佳奈(東京大学大学院)

本発表では、ウィリアム・メイクピース・サッカーの『英国のスノップたち』(1846-1847)における家庭表象とその風刺性を考察した。『パンチ』で連載された本作品は、スノバリーの愚かさや滑稽さを多彩に解剖する風刺作品であり、スノップたちの上昇欲求と消費行動が引き起こす家庭問題を描くことでヴィクトリア朝における家庭イデオロギーの欺瞞を明らかにしている。さらに、本発表は、家庭が崩壊するプロセスが継起的な場面描写によって印象的に描かれていることに着目し、ウィリアム・ホガースの連作版画との比較を行った。サッカーの講演『18世紀英国ユーモリスト』におけるホガース分析を手掛かりに、両者の表現技法における共通点を論じた。加えて、従来指摘されてきた視覚的な類似性を再検討するだけでなく、善悪を対照的に捉えるホガースの風刺観との差異として、風刺家自身も批判対象となる本作品の矛盾をはらんだ構造を提示した。これにより、サッカー作品の骨子ともいうべき語りの自己諧謔性が本作品の風刺的視線に表れていることを明らかにした。

2. 19世紀ロンドンにおける娯楽の社会的位置付けについて——手遣い人形劇『パンチ&ジュディ』を例に

平野 惟(神戸大学研究員)

パンチ&ジュディ(P&J)はよくイギリスで王政復古以来の歴史を持つと

されるが、現在知られるプロットと上演形式の完成は18世紀末から19世紀初頭ごろである。これは娯楽が主要な場であった娯楽市を失い、とりわけ都市部で「余暇」行動として再編成された時期と一致する。本発表ではP&Jを「18世紀の広場から19世紀の街頭へ飛び出した」娯楽とし、同時代の演劇的見世物と比較しながら、なぜこの形で現代まで保存されるようになったのかを考察した。まずP&Jは移動舞台を用いて上演の時間や場を操作することで、その観劇行為を観客の階層・身分ごとの多様なニーズに合わせて意味づけることができた。また当時の記録からは、P&Jがかつての娯楽を知る者のノスタルジーを喚起する存在であったことが伺われ、これがパンチの暴力的行動を反面教師として子どもに見せ、その背中越しに「そうした野蛮を克服した今の自分」も楽しんで見るという観劇スタイルを可能にしたのではないかと指摘した。

### 3. トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における移住と帰国の意味 ——アラベラを中心にして

橋本 史帆(関西外国語大学)

ヴィクトリア朝時代の移住にまつわる問題が、いかにトマス・ハーディの『日陰者ジュード』(1895)に登場するアラベラ・ドンとリトル・ファーザー・タイムに描出されているか検証した。まずアラベラには、当時の価値観にそぐわない行為を行い、オーストラリアに送られた貧しい移民の姿が反映されていることを確認した。また、家族の崩壊を経験したアラベラの帰国が、国内の不穏分子を追い出し、オーストラリアのイギリス化を目指したイギリスの移住政策と帝国主義体制の揺らぎを表出していることを明らかにした。次に、「逆植民地主義」に言及しながら、リトル・ファーザー・タイムが他国からの侵入者に位置付けられていることを指摘した。そして、異人種の侵入に怯える当時の人々の心理が、少年の自死に描きだされているとした。しかし、小説は少年を家族の一員として受け入れるジュード一家を描いていることから、ハーディが非イギリス的なものを排除する風潮に懸念を示し、帝国主義の正当性を読者に問いかけていると結

論付けた。

## 第二室

### 1. Swinburnian Woman in Sin: Phædra

Ayvazyan Lilith (慶応義塾大学大学院)

Throughout his life, Algernon Charles Swinburne (1837-1909) was fascinated with Greco-Roman literature. It is a known fact that he read Sappho and had great love for her poetry, and his letters as well as critical works suggest that he had been reading many other memorable works of classical literature. Swinburne revived the tragedy of Phædra in his *Poems and Ballads* of 1866 after nearly two centuries of neglect – Jean Racine's *Phèdre* (1677) was the last notable work on the story of Phædra and Hippolytus before the English poet took it up.

Despite the reputation and fame of the classical myth, and unlike the versions written by Swinburne's predecessors (Euripides, Seneca, Ovid and Racine), his Phædra has not undergone a meticulous research up to this day. Though we can come across several brief remarks on this short poem, they are conducted not by experts of Victorian literature, but specialists of Euripides and Seneca. Unfortunately, and predictably, all of this research largely suffers from some limitations. Swinburne's Phædra is viewed as of aggressive and masochistic nature. Nonetheless, the critics of Swinburne seem to disregard the fact that Phædra is a woman madly in love with her stepson. Moreover, this Phædra, is a strong and independent woman, empowered with her willingness to give up her life instead of continuing her existence in the unbearable reality of her unrequited love and family curse.

An interpretation similar to Swinburne's can be observed over half a century after his Phædra was first presented to public, and, interestingly enough, by a female poet from Soviet Russia. Marina Tsvetaeva was the first woman to tap unto the myth of Hippolytus and Phædra by writing her *Fedra*

in 1927.

The aim of this study is to shed light on the character of Phædra in Swinburne's poem, the differences that can be revealed in comparison with the classical originals, show how he treated Phædra, and finally how he fit her into the society of the 19th century Victorian England. Moreover, parallels will be drawn between Swinburne's and Tsvetaeva's poems. In the present research, the importance of Phædra's strength and feminine power will be stressed out. To do so, not only Swinburne's Phædra, but also other of his poems will be studied, with the goal of identifying the Swinburnian woman in sin.

## 2. ウォーターハウスの2つの《レイミア》

——主題解釈の変化をめぐって

伊藤 ちひろ (関西学院大学)

J・W・ウォーターハウスは1905年と1909年に、《レイミア》と題した油彩画をロイヤル・アカデミーに出品した。この2点の絵画の着想源は、ギリシア神話の怪物ラミアの物語と、それに基づいてJ・キーツが1820年に発表した詩「レイミア」である。とはいえ舞台は古代から中世に移されているほか、物語には登場しない花が描かれている。またそれぞれで描かれる場面も異なるが、両作品の比較検討は必ずしも十分になされているわけではない。本発表では2点の《レイミア》におけるウォーターハウスの発想の変化が「レイミア」の物語解釈の両義性を示しており、それが花や鏡を用いた独自の絵画表現であらわされていることを明らかにする。そこでウォーターハウスの習作や、同時代の画家H・ドレイパーによる、比較的神話に忠実とされる《ラミア》(1909年)などと比較した。

### 3. Millais as a Sartorialist: Costuming the Literary Subjects by John Everett Millais

浅野 菜緒子 (国立西洋美術館)

This paper has traced how John Everett Millais (1829-96) investigated costuming and developed sartorial illustrations in his early art. Sartorial elements are essential in the works of the Pre-Raphaelite artists and those who were closely associated with them. Preceding studies and exhibitions, such as Roger Smith and Leonée Ormond's examination of Camille Bonnard's influence and the Tate retrospective exhibitions of the Brotherhood in 1984 and 2012, have paid attention to the fashions that were depicted, often designed by certain artists such as Dante Gabriel Rossetti (1828-82) and Edward Burne-Jones (1833-98). Compared to his fellow Pre-Raphaelites' interest in costume descriptions, however, Millais's sartorial interest and fashion illustrations have not been examined much previously. Focusing on some of early works by Millais including *Isabella* (1848-49), *The Woodman's Daughter* (1850-51), *Ophelia* (1851-52) as well as some works from his transitioning period from the Pre-Raphaelitism to more symbolic style, this paper has explored the elaborate descriptions of costumes based on his meticulous research of different garments and fabrics for his literary subjects in the works of the Pre-Raphaelite and post-Pre-Raphaelite periods. Through detailed examination, this study has attempted to uncover the artist's unexplored aspect as a sartorial draughtsman and to reveal that his sartorial interest contributed to his overall artistry.

## II. シンポジウム

ヴィクトリア朝と音楽—せめぎ合う境界

司会：金山 亮太 (立命館大学)

クラシック音楽と聞いて想起する作曲家の中にイギリス人の名があるか

と言えば首を傾げる人もいるだろう。イギリスは17世紀のヘンリー・パーセルを最後に、長らく作曲家の輸入超過国であった。しかし19世紀には音楽人口の裾野が広がり、プロ・アマの垣根を超えた音楽文化が生まれていた。本シンポジウムは二部構成とし、第一部では科学者と音楽家が共同で学会を立ち上げ、理論と実践という異なるアプローチから音楽学の確立を目指した状況をたどる発表と、文学における女性音楽家の表象の変化に着目し、男性の領域を侵犯しない分野で女性が存在感を発揮するようになる過程を論じる発表があった。続く第二部ではステイーヴンソンの詩集にヴォーン・ウィリアムズがメロディをつけた歌曲のパフォーマンスを聴いた。それぞれの曲に関する短い解説の後に現役の声楽家によって披露される歌声によって、聴衆にはヴィクトリア朝のサロンの雰囲気をも束の間味わっていただけたことと思う。

## “George”をめぐる音楽

報告：吉田 朱美(近畿大学)

20世紀初頭、ドイツ人の批評家 Schmitz 氏によって「音楽なき国」と呼ばれたイングランドであるが、後期ヴィクトリア朝期に音楽は文学や美術といった他の芸術ジャンルによって模倣され、表現される対象として特権的な地位を付与されるに至っていた。吉田報告は、特に1880年代から90年代の散文作品が、主題と形式の両面においてそれまでの既存の型や枠組みを打ち破り新たな可能性を模索していく中で、音楽という別の芸術ジャンルとの交流がいかに大きな役割を果たしたかを、“George”という固有名詞を手掛かりとしつつ探った。ニーチェの影響を受けた「新しい女」George Egertonの短編作品において、音楽的感性は人間の深層に潜む本性を顕にし、従来の道徳観や家庭・性差の境界を突き崩す。またフランス人作家 George Sandの音楽家小説 *Consuelo* の影響のもと、美しい歌声と内面の崇高な魂、そして社会的使命とが一体となった歌姫像が George Eliot、George Meredith、George Mooreらの小説作品で描き出される。

## Musical Association (1874～) 創設期の担い手たち—音楽家と科学者

報告：西阪多恵子(お茶の水女子大学)

音楽の学会 Musical Association は、1874年に音楽家と科学者によって創設された。音楽と科学両分野にわたって音響学が著しく発展した時代である。例会では、主に科学者による音響学関連の発表に、音楽家も科学者も入り混じっての討議が続いた。中には、「音楽は科学ではない」と主張する音楽家会員もいる。かみ合わない議論や話題の逸脱に討議が終始することもあった。だが、会員たちは互いに考えや立場を異にしつつも、協働して音楽の学会を担っていく。接点はアマチュアであった。音楽と科学いずれもアマチュア的と評される伝統を背景に、互いの敬意や幅広い知的好奇心、一般の人々への教育的関心など、当時の教養あるアマチュアの資質やふるまいは、各会員がアマチュアか否かに関わらず、学会に行き渡り、節度ある自由な議論を支えた。創設期の数年間、Musical Association は、科学者と音楽家、科学と音楽を結ぶ場として音楽文化の一翼を担った。その根底にはアマチュアの伝統が脈々と息づいていた。

## Ralph Vaughan Williams, *Songs of Travel* (1901-04) をめぐる旅

報告・演奏：声楽家 山崎 太郎

*Songs of Travel* は Robert Louis Balfour Stevenson の詩集 *Songs of Travel and Other Verses* (1896) から選ばれた9編の詩による連作歌曲集である。8曲目までは1901～04年の間に作曲されたが、終曲は死後に発見され、作曲年は不明のままである。本発表ではヴィクトリア朝最後の年から作曲されたこの歌曲集の分析を行うとともに、実際の演奏を通してヴィクトリア朝文化の一端を会場の聴衆と共有した。なお、演奏には室内楽やオペラのピアニストとして幅広く活躍中である中谷友香氏にご協力をいただいた。学生時代から折にふれてイギリスの作品を演奏している私にとって、20世紀のイギリス音楽界復興の中心人物とされる Ralph Vaughan Williams の作品を本学会で演奏する機会をいただいたことは、この上ない喜びであった。こ

の場を借りて御礼申し上げたい。

### Ⅲ. 特別講演

ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダ―周縁化された女性たちの戦略

香川 せつ子(西九州大学)

イギリスが「近代スポーツの母国」と称される所以は、ヴィクトリア時代におけるラグビーやクリケットとの発展とアスレティシズムを通じた世界伝播にある。しかし、ヴィクトリア朝文化の一局面としてスポーツが語られることは多くはなく、あったとしてもフットボールやクリケットなど男性スポーツに限られていた。本講演では男性スポーツの繁栄の陰で進行した女性のスポーツや身体運動に焦点をあて、ジェンダー化された身体観や行動規範との対立、格闘、調和と融合を通して独自のスポーツ文化を形成していく過程を、女性教育家の戦略的活動を通して分析した。なかでもマルティナ・オスターバーグが、母国で修得したスウェーデン体操をイギリスのスポーツ文化と融合させることにより中流階級女子教育へ浸透させ、女性体育教員養成を梃子としたネットワークの構築に至る過程を重視し、中心的な論点とした。